

柄鏡形住居跡小考

西山太郎

1. はじめに

酒々井町伊篠白幡遺跡は印旛郡酒々井町伊篠字八木野343他に所在し、縄文時代から奈良・平安時代に至る遺構・遺物が発見された遺跡である。これは昭和58年8月1日から翌2月29日に発掘調査が実施され、『酒々井町伊篠白幡遺跡』（千葉県文化財センター、1986）として刊行されている。

これによると伊篠白幡遺跡は、印旛沼に注ぐ江川によって樹枝状に開析された広大な台地に立地する。4地点が調査され、A地点からは先土器時代石器群、縄文時代後期堀之内I式の住居跡20軒、埋甕6基、焼土跡2基、古墳時代住居跡36軒、歴史時代住居跡44軒、掘立柱建物跡23棟、土壇2基、B地点からは歴史時代住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟、ピット群3か所、C地点からは歴史時代住居跡3軒、D地点からは歴史時代住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟などが検出している。

さて、伊篠白幡遺跡A地点からは、早期（田戸下層式、田戸上層式、子母口式、条痕文系）、前期（黒浜式、諸磯式、浮島式）、中期（下小野式、五領ヶ台式、阿玉台式、中峠式、勝坂式、加曾利E式）、後期（堀之内式、加曾利B式）が出土している。後期堀之内式を主とする。田島新氏は、同報告書において、石鏃、磨製石斧、打製石斧について検討を加え、その形態による出土分布の違いから「廃棄領域」の設定を行っている。また、磨石については、その機能を「磨石は基本的絶対条件として「磨る」痕跡である磨耗痕をもっていることであり、付随的条件として「潰す・叩く」機能を供えていたことが指摘できた。」(P.699)と述べている。

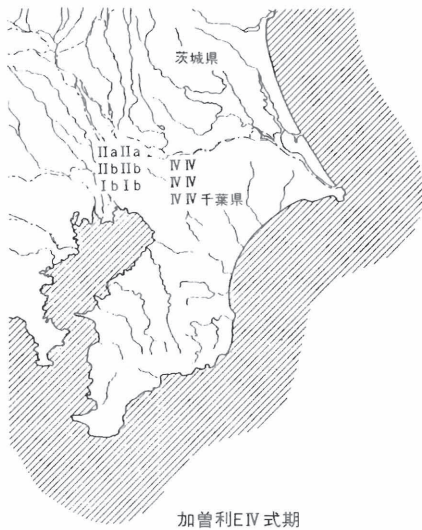
伊篠白幡遺跡A地点の縄文時代集落は竪穴住居跡16軒、柄鏡形住居跡2軒、埋甕6基で構成されている。宮城孝之氏は、住居跡の分布等から集落を5地点に分け、北東部の柄鏡形住居跡、埋甕検出地をa地点、東部の空白部で尾根状に谷に向かう地点をb地点、南東部の竪穴住居跡集中箇所を

c地点、南部の竪穴式住居跡集中箇所をd地点、南西部の竪穴住居跡集中箇所をe地点、中央部の空白部でいわゆる広場をf地点としている。また、三浦和信氏は各地点の内容的相違を石皿、石棒、石剣等から検証している。石皿ではa地点とc地点～e地点で大きな出土上の違いが認められなかったことから、「柄鏡形住居跡も他の住居と同様、日常的調理用具である石皿を必要とした」と推定している。(P.696)。石棒、石剣は6点出土している、住居の配置に一致して分布するものの、柄鏡形住居跡、埋甕の領域と一致しないとしている。また、小礫の分布特徴は明確にできなかったが、中・大礫は住居の配置に一致し分布していると述べられている。

ところで、この集落は堀之内I式期に構築されたものであり、宮城孝之氏は出土土器等から住居跡群は大旨3期に分けることができ、各期には6軒程度の住居が伴い、これは小期に分けられる可能性が考えられ、各期には最低3軒の住居が共存しているものと推定している。さらに、竪穴住居跡、柄鏡形住居跡、埋甕の分布から「居住群の位置する南側を居住空間、埋甕群の位置する北東側を儀礼空間」(P.708)、集落の「南側は日常的空間、北側を非日常的空間」(P.708)と指摘し、さらに「柄鏡形住居跡には儀礼空間にふさわしい竪穴成員の居住が推定できる。」(P.710)とも述べている。

このように伊篠白幡遺跡A地点は縄文時代後期堀之内I式期に形成された集落であり、中央に空白部分、いわゆる広場を有し、縄文時代の集落に多く認められる馬蹄形集落に類するものである。このようなことから、この集落は他の集落を考えるに当たって極めて有用な資料と言えよう。

ここでは、縄文時代集落を知る手掛かりとして、伊篠白幡遺跡から検出された柄鏡形住居跡をテーマとして千葉県における柄鏡形住居跡の在り方を考えてゆきたい。



加曾利EIV式期



称名寺式期



堀之内式期



加曾利B式期以降

第1図 柄鏡形住居跡分布図

2. 千葉県における柄鏡形住居跡

柄鏡形住居跡の研究は、村田文雄氏 (1975, 1976, 1979), 山本暉久氏 (1976, 1977, 1980, 1987), 本橋恵美子氏 (1989) 等によって進められてきたが、これらの論文の中で地域的特徴として千葉県における柄鏡形住居跡が述べられている。特に、千葉県を対象とした柄鏡形住居跡については、米田耕之助氏 (1980), 郷田良一氏 (1982), 川名広文氏 (1984) の論文に詳しい。

まず、このような諸論文を参考として、その後、蓄積された資料をもとに千葉県における柄鏡形住居跡を見てゆこう。

千葉県における柄鏡形住居跡^(註1)について、その

分布とその形状^(註2)をまとめたのが別表、各時期毎にその分布状況を示したのが第1図である。これらによると、千葉県における柄鏡形住居跡は53例、17遺跡の出土例がある。加曾利EIV式期は6例、称名寺式期は18例、堀之内式期は29例である。従って、その出現は加曾利EIV式期であり、称名寺式期・堀之内式期に盛行し、加曾利B式には姿を消すことが分かる。加曾利B式以降は、加曾利B式3例、曾谷式1例、安行I式5例、安行IIIa式2例である。後述するように、これは柄鏡形住居跡の概念から逸脱するものと考えられる。

中期末葉 (加曾利EIV式期) この時期の柄鏡形住居跡の分布は、松戸市金楠台遺跡・坂之台遺跡

等千葉県北西部を中心する地域に限定している。その形態の特徴は張出部が長い点である。言い換えれば、II型（円形長柄）の認められるのが、この時期の特徴である。住居跡径と張出部の長さの比率は、他の時期に比べ、散在的に分布していることが分かる。張出部の長いものを典型とするもの、短いものも認められるのである。

柄鏡形住居跡は、「中期終末の加曾利EⅢ・EⅣ期に忽然と出現する。しかもその形状は特異で、内部主体が平均約4m前後という小型であるにもかかわらず、幅約1m強、長さ約2m弱の柄部（張り出し）がつき、内部主体・柄部には敷石を敷設する事例が多い。」（村田文雄、1979）、「縄文時代中期後半、中部山地帯から南関東域を中心として出現を見た住居内敷石風習と埋めガメ風習は敷石部位の拡大と埋めガメを中心とする場の拡大という中に、第II期（加曾利E末、称名寺期）の典型的な柄鏡形住居形態が生み出されたものとみなすることができる。」（山本暉久、1976）とある。つまり、柄鏡形住居跡は、南関東西部において加曾利EⅢ期に出現し、加曾利EⅣ期には形態的に確立したものと見えよう。

千葉県におけるその初源は、松戸市金楠台遺跡2号住居、松戸市坂之台遺跡2、3号住居跡のように張出部の長いものを典型とする。張出部の短いものもある。このことは柄鏡形住居跡が確立した形で出現したものと考えができよう。これらには敷石が認められない。この時期が加曾利EⅣ式期であることから、東京都・神奈川県等南関東西部において、加曾利EⅢ期に出現していた柄鏡形住居跡形態の敷石風習が欠落した形で、加曾利EⅣ期に千葉県北西部に移入されたものと考えすることができる。これは石が少ないという千葉県における自然環境から発生した柄鏡形住居の千葉県の在り方であろうか。

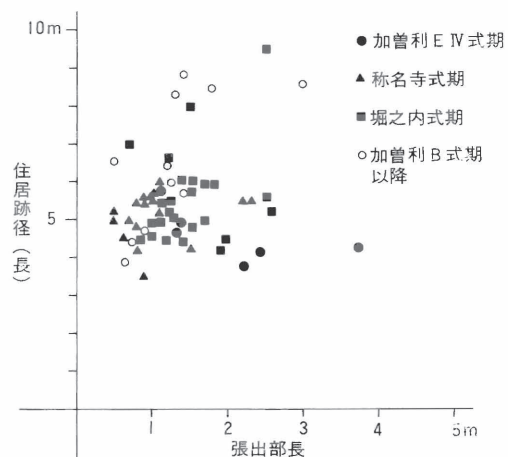
松戸市金楠台遺跡では住居跡2軒が検出され、いずれも柄鏡形住居であり、内1軒（2号住居）は加曾利EⅣ式期に比定される。これは張出部を掘り込み、ピット列を方形に配したものであり、張出部の前面にピットが認められる。埋甕であろうか。住居内から石棒片が出土している。

松戸市坂之台遺跡は住居跡が3軒検出され、いずれも柄鏡形住居跡である。内2軒は張出部を掘り込んで構築している。埋甕は認められない。

市川市堀之内、権現原地区では、縄文時代の住居跡が21軒され、加曾利EⅣ式期のものは3軒、内、柄鏡形住居跡が1軒（19号住居）。この住居跡の張出部前面の延長線上に埋甕が2基、内1基は入れ子状態であり、鹿角が出土している。これについては『住居改築等に際しての儀礼行為を想起させる』（P.298）としている。

曾谷貝塚17地点では縄文時代住居跡が8軒検出し、2軒（8、11号）が柄鏡形住居跡である。11号から石棒が2点出土していて、内1点は出土状況から入口部に立てかけられたもの、他の1点は炉の北西約1mのところを意識的に立て据えられたものと推定されている。これには祭祀行為としての被熱、破壊、破壊面の研磨、くぼみ穴を指摘している。

これらと関係して円形ないし不整形の掘り込みを呈し、ピット列（対ピット）を有しない張出部の存在する住居跡（V型）が佐倉市江原台遺跡、龍角寺ニュータウン遺跡No.14地点から出土している。この住居跡は住居本体に不整形の張出部が認められることで、柄鏡形住居跡との関連性を想像させる例である。しかしピット列を有しない点で趣を異にする。加曾利EⅣ式期の柄鏡形住居跡はピット列を持つことが一般的である。とすると、V型は柄鏡形住居跡と目的を異にして構築されたものと言えよう。張出部の用途については、これを対ピットとして機能・用途を埋甕との関係で呪術的機能をもつとする説（岩崎、1971）、出入口の柱穴とする説（山本、1976）、垂木を支える柱穴して、さらに煙だしの穴を架構したとする説（笹本、



第2図 住居跡と張出部の長さ

1976)、柱を立てて入口両側の壁面を構成したと考える説(宮本, 1983)、出入口部から住居本体への門柱のような木造表象物の存在を想定する説(川名, 1984)など諸説がある。佐倉市江原台遺跡等検出例にはピット列など特別の施設を有しないので、これらとは異なる施設と考えられよう。あるいは、単に入口として使用したのであろうか。今後の調査例の増加を待ちたい。

これに対して松戸市金楠台遺跡例、市川市堀之内・権現原地区例等は張出部にピット列を有している。これは南関東西部の柄鏡形住居跡の風習を継承していると考えられることから、佐倉市江原台遺跡・栄町龍角寺ニュータウンNo.4遺跡例は南関東西部から伝わった柄鏡形住居跡採用の風をそのまま受け継いだものでなく、あるいはその風をコピーしたものとも考えられよう。

佐倉市江原台遺跡では加曾利EIV式期の住居が19軒検出され、内、V型が4軒出土している。4軒のうち1軒から埋甕が出土している。

栄町龍角寺ニュータウンNo.4遺跡からは15軒の縄文時代の住居跡が検出され、内9軒が加曾利EIV式期であり、2軒がV型であった。張出部にはピットが認められる。

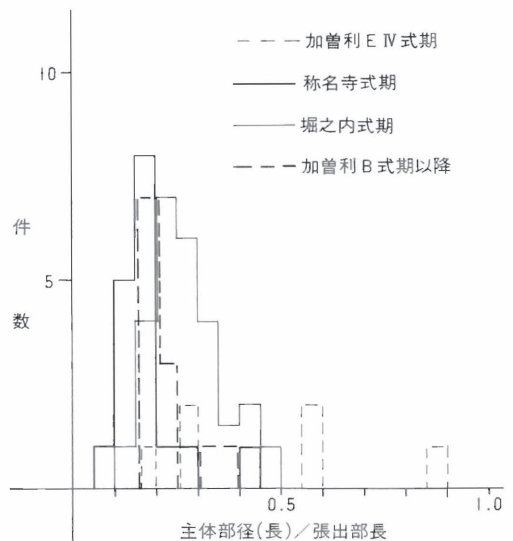
後期初頭 (称名寺式期) この時期になると、加曾利EIV式期に6例であったものが、18例に増加する。形態的には前の時期で見られたII型が姿を消し、I型が取って変わる。また、張出部は前の時期にa, b型が主力であったものが、この時期にはb型が主であるものの、d, e型が増加する。すなわち、方形の張出部が多様化し、扇形(ハの字状ピット列)が見られるようになるのである。また、前の時期に比べ、住居跡の径がまとまり、張出部が短くなり、計測値が集中化傾向を呈するようになる。住居跡径にくらべ、張出部長の比率は一挙に高まる。即ち、張出部の短傾向が強まるのである。ここに柄鏡形住居跡の変質の兆しを読み取れることができる。その分布も東京湾沿岸にひろがるようになる。埋甕は18例の内11例の住居跡から出土している。

郷田良一氏(1982)が指摘しているように、張出部の前面に大形ピットがみられることも、この時期の特徴の一つであろう。この例は11例を数えることができる。時期的に異なるが、市川市堀之内、権現原地区(市川市教育委員会, 1987)の柄

鏡形住居跡(加曾利EIV式期)の1軒では張出部前面の延長線上に埋甕が2基検出され、内1基が入れ子状態であり、鹿角が出土しているのである。これは大形ピットが祭祀に関わるものであることを想起させるのである。一方、大形ピット上に板をのせて、貯蔵穴に用いたとする説(郷田良一, 1982)もある。いずれとも決し難いが、柄鏡形住居跡が本来的に埋甕と重要な関わりをもっていることからすると、前者が有力ではあるまいか。

ところで、松戸市金楠台遺跡では竅穴住居跡2軒が検出され、いずれも柄鏡形住居跡であった。称名寺I式期に比定される1号住居の張り出し部基部には埋甕が認められる。また、埋甕の周辺に配石が存在する。これは「住居内敷石風習と埋めガメ風習」から「典型的な柄鏡形住居形態が生み出されたもの」(山本暉久, 1976)ということを知る手掛かりと言えよう。

後期中葉 (堀之内式期) 柄鏡形住居跡は、加曾利EIV式期には6例、称名寺式期に18例あったものが、この時期には27例と増加する。形態的にはすべてI型となり、II型はまったく認められない。張出部はd型が主であり、前の時期と大きく変わらない。b, e型も認められる。すなわち、方形の張出部が多様化し、扇形(ハの字状ピット列)が一般的となるのである。また、張出部は前時期にくらべ、さらに短くなり、住居跡径もばらつきが減じ、集中化する。しかし、住居跡径と張出部の長さの割合は前時期にくらべ、散漫になる。



第3図 主体部と張出部の比率

内部施設としての埋甕は類例が少ない。27例のうち1例である。千葉市木戸作遺跡28号住居跡は張出部前面に大形ピットが存在するし、住居内に埋甕をもつ。これと比べて興味あるのは、伊篠白幡遺跡である。ここでは集落北東部に柄鏡形住居跡が検出されているが、ここに埋甕は認められず、住居外に出土しているのである。このように柄鏡形住居跡の張出部の形態が多様化すること、住居内部から埋甕が消えることは、柄鏡形住居跡の内容が変質したものと言えよう。つまり、柄鏡形住居跡はこの時期以降衰退を辿っていったと考えることができるのである。

千葉市小金沢貝塚では後期堀之内I式期が17軒検出している。17軒の内6軒は柄鏡形住居跡であり、この集落の柄鏡形住居跡は短柄であり、ピットは扇形に広がることが多いこと、張出部が円形に堀込みが認められること、ピット列間や張出部

前面に大形ピットが存在することが多いこと、柄鏡形住居が集中すること等の特徴がある。

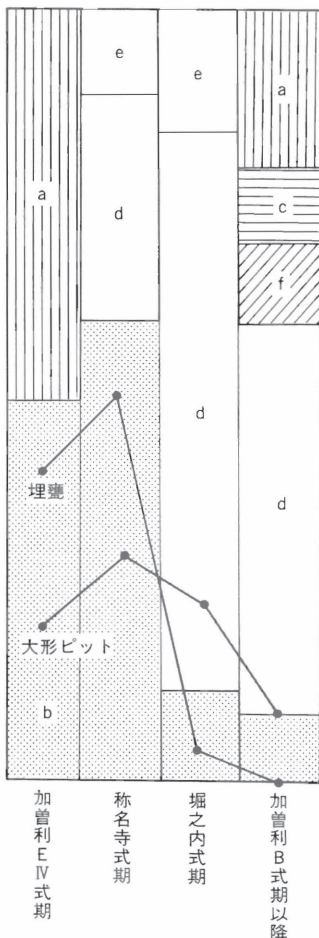
千葉市木戸作遺跡では後期前半（堀之内式期）の住居跡が10軒出土した。柄鏡形住居跡は3軒（28・29・30号址）である。33号もその可能性がある。その特徴は、短柄であり、ピットは扇形に広がる人が多いこと、柄鏡形住居跡は一括して集中すること等である。

後期後半（加曾利B式期）以降 柄鏡形住居跡の基本的な形である円形が崩れ始め、VI型（D形、台形住居形態）など様々な形となる。張出部も方形、扇形（ハの字状）が崩れ、変形してくる。住居跡径と張出部長の計測値は全体的にまとまりがなく、散漫な分布を呈している。また、それらの比率も前の時期にくらべてまとまりがなくなり、長張出部傾向となる。埋甕もまったく見られなくなる。これらを型式別にみると、一時期の出土例が1、2か所となる。また、これらの住居跡は張出部及び住居跡の形状、さらに埋甕が認められなくなる等、前の時期の柄鏡形住居跡の形から逸脱したものとなる。すなわち、後期後半には柄鏡形住居跡が姿を消したと言えよう。張出部は入口部としてのみ利用されたのであろう。

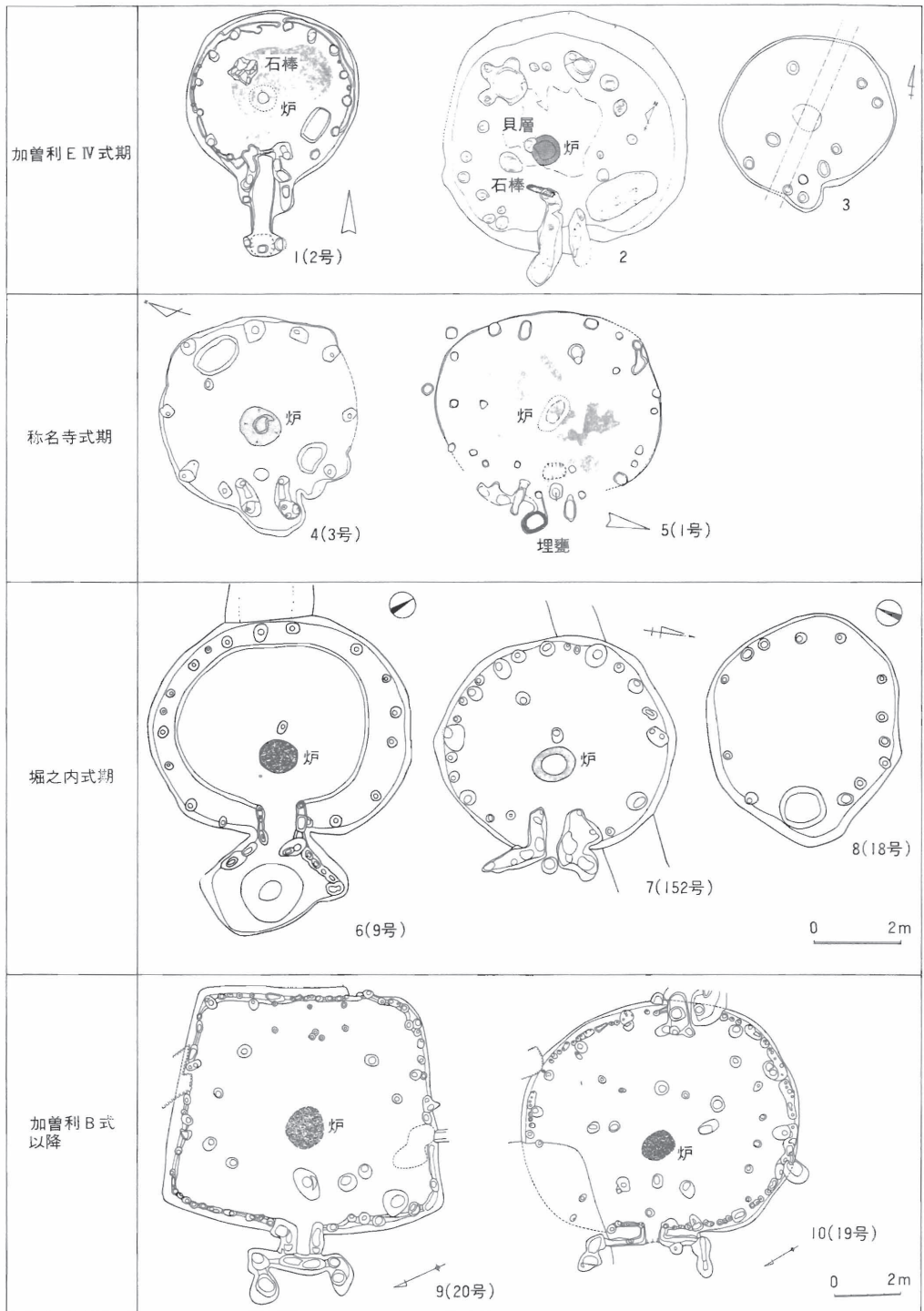
3. まとめ

千葉県における柄鏡形住居跡の変遷を住居跡径と張出部長の比率から見ると、中期末の加曾利EIV式期には散漫な分布を呈するものが、称名寺式期には一挙に集中化、短張出部傾向化し、堀之内式期には逆に長張出部傾向を呈し、散漫な分布を示すようになる。このことは千葉県における柄鏡形住居跡が中期末の加曾利EIV式に移入され、称名寺式期に千葉県の在り方として確立し、堀之内式期に崩れ始め、ついには姿を消すことを示していると言えよう。これは柄鏡形採用の風が千葉県において独自に変遷していくことを示しているのであろう。千葉県における縄文土器が称名寺式期から堀之内式期にかけて北関東の影響を受けるようになることは、柄鏡形住居跡の一連の変遷に大きく関わっていると考えられる。

ところで、柄鏡形住居跡研究の主題とも言える柄鏡形住居跡の集落における在り方を代表する二説を村田文雄、山本暉久両氏の論文から見て見よう。村田文雄氏は、柄鏡形住居は「一つの集落に



第4図 張出部形態の時期別割合と埋甕の大形ピットの出土数の変化



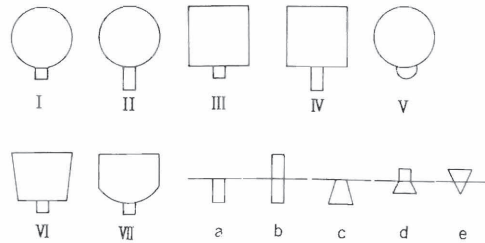
第5図 柄鏡形住居跡変遷概念図 金楠台遺跡(1,5), 江原台遺跡(3), 権現原地区(4), 小金沢貝塚(6,8), 伊篠白幡遺跡(7), 祇園原貝塚(9,10)
3,8,9,10は参考として図示した。

あって、通常の竪穴住居址群とは明瞭に占有領域を異にして出現し、やがて後期には（中略）石棺墓など他の石造遺構群と複合し、ときには一大石造遺跡を形成するところに重要な視点が存在するのである。」（村田文雄，1979；P.68）と述べている。一方、山本暉久氏は『柄鏡形（敷石）住居跡』（山本暉久，1980；P.65）として、「敷石住居は特殊住居＝共同家屋では全くなく、敷石を施すと言う時代的、地域的特性をもった一般住居であったと結論付けることができるのである。」（山本暉久，1979；P.9）と述べている。また、村田文雄の柄鏡形住居跡＝非一般住居説を屋内、屋外埋葬施設の変遷と埋葬の性格等の詳細な分析した上で否定している。いずれにしても、この二説の一般住居説、非一般住居説は柄鏡形住居跡の集落における位置付けと言う点で重要であり、縄文時代研究に欠くことができない。この考え方がその後の柄鏡形住居跡研究にも大きく影響している。

酒々井町伊篠白幡遺跡，市川市堀之内・権現原地区，千葉市小金沢貝塚，千葉市木戸作遺跡では全面調査が実施された。伊篠白幡遺跡では「柄鏡形住居跡には儀礼空間にふさわしい竪穴成員の居住が推定できる。」（P.710），小金沢貝塚では「中期末の円形住居から後期前半の柄鏡住居へと移行する。」（P.343），木戸作遺跡では「一定領域に執拗に構築され続けた。」（P.539）と述べられているように、村田，山本両説が微妙に影響していることが認められる。

ところで、これらの遺跡では柄鏡形住居跡単独の集落はなく、円形住居と同時に設営された集落であること、柄鏡形住居跡が集落の限られた地域に集中する傾向があることを指摘できよう。このことは千葉県において柄鏡形住居跡はある特別な目的のために採用された可能性を考えられよう。一般住居説のみで解釈できない問題を含んでいる。南関東西部において普遍的であったものが、外縁部に広がる時異なる内容を付加して広まったのでなからうか。千葉県における柄鏡形住居跡が出現、盛行、崩壊の変遷を迎えるのは、そのことを現わしていると言えまいか。

集落における柄鏡形住居跡の在り方は集落そのものに関わることであり、出土遺物等からも検討しなければならない。また、他遺跡との関わりで地域、集落研究に反映すべき重要な問題を含み、



第6図 柄鏡形住居跡類型（I～VII）と張出部類型（a～e）

今後の縄文時代集落研究の課題の一つである。

本稿では、千葉県に於ける柄鏡形住居跡が出現から崩壊への過程を呈するものであり、一般住居説のみで解釈できない問題を含んでいると予想した。柄鏡形住居跡は佐倉市吉見台遺跡，市原市武士遺跡（県センター，1988，1987）等でも出土している。これらの調査結果によって本稿で提示した柄鏡形住居観の修正も予想される。ともかく，ここでは集落研究における柄鏡形住居跡研究の重要性を確認しておきたい。なお，本稿で筆を取る切掛けとなった酒々井町伊篠白幡遺跡の集落の在り方については，内容を検討するに至らなかった。別に考えてみたい。

注

- 1) 柄鏡形住居跡は、竪穴住居本体に張出部の付設された形状が柄鏡形を呈することからこのように呼ばれているが、その生成から山本暉久氏は『柄鏡形（敷石）住居跡』と敷石の施されていない住居を『張出付（出入口施設を有する）住居』としている。本稿で取扱うのは、山本暉久氏による張出付（出入口施設を有する）住居である。本稿では千葉県における柄鏡形住居跡が南関東西部の『柄鏡形住居跡』から移入されたものであり、その千葉県の在り方を示していると言う点から、従来の呼び方を使用しておく。また、後期後半に現れる張出部の付いた住居は参考として取扱いたい。
- 2) 本稿では、住居跡主体部及び張出部（柄）の形状を、I（円形短柄），II（円形長柄），III（方形短柄），IV（方形長柄），V（円形，柄部が不整円状に張り出す），VI（台形，柄部は短柄または長柄），VII（D形，柄部はまたは長柄）に6分類し、張出部を方形と扇形に分けた。また、張

出部が方形で、住居の壁を起点としているものをa、住居内を起点としているものをb、扇形で住居の壁を起点としているものをc、住居内に起点があり、住居部が直線となっているもの、つまり方形と扇形が結合したものをd、住居部から扇形に広がるものをe、その他をf形と細分した。

文 献

1) 論 文

- 村田文雄, 1975『柄鏡形住居址考』(古代文化 27-11)
- 村田文雄, 1976『縄文時代集落址研究の一動向』(考古学ジャーナル No.130)
- 村田文雄, 1979『続, 柄鏡形住居址考』(考古学ジャーナル No.170)
- 山本暉久, 1976『敷石住居出現のもつ意味(上), (下)』(古代文化 28-2, 3)
- 山本暉久, 1977『縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について(1), (2)』(信濃 29-11, 12)
- 山本暉久, 1980『縄文時代中期終末期の集落』(神奈川考古 第9号)
- 米田耕之助, 1980『縄文時代後期における住居形態の一樣相』(伊知波良 3)
- 郷田良一, 1982『いわゆる「柄鏡形住居址」について』(千葉県文化財センター研究紀要7)
- 山本暉久, 1987『敷石住居終焉のもつ意味(1)~(4)』(古代文化 39-1~4)
- 本橋恵美子, 1989『縄文時代における柄鏡形住居址の研究(1), (2)』(信濃 40-8, 9)

2) 報告書

- 『昭和60年度 市川東部遺跡群発掘調査報告』(市川市教育委員会, 1986)
- 『昭和62年度 市川東部遺跡群発掘調査報告』(市川市教育委員会, 1988)
- 『曾谷貝塚E地点発掘調査概報』(曾谷貝塚発掘調査団・市川市教育委員会, 1978)
- 『堀之内』-市川市堀之内地区土地区画整理事業予定地内遺跡発掘調査報告書- (市川市堀之内地区土地区画整理組合準備委員会, 市川市教育委員会, 1987)
- 『松戸市一の谷西貝塚発掘調査報告書』(前田潮・川名広文編, 一の谷遺跡調査会, 1984)
- 『貝の花貝塚』松戸市文化財調査報告第4集,

(八幡一郎編著, 松戸市教育委員会, 1973)

『坂之台遺跡・東平賀遺跡第3次調査』(松戸市教育委員会, 1983)

『松戸市金桶台遺跡』(財団法人千葉県都市公社・日本鉄道建設公団東京支社, 1974)

『下ヶ戸貝塚』我孫子市埋蔵文化財報告第4集(我孫子市教育委員会)

『小金沢貝塚』千葉東南部ニュータウン10(住宅都市整備公団・千葉県文化財センター, 1982)

『木戸作遺跡(第2次)』千葉東南部ニュータウン7(日本住宅公団首都圏宅地開発本部・千葉県文化財センター, 1979)

『千葉市矢作貝塚』(千葉県水道局, 千葉県文化財センター, 1981)

『千葉市築地台遺跡・平山古墳』-千葉県東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書2(千葉市平山地区)- (日本道路公団東京第一建設局, 千葉県文化財センター, 1979)

『祇園原貝塚』上総国分寺台発掘調査概要V(滝口宏編, 上総国分寺台発掘調査団・市原市教育委員会, 1978)

『祇園原貝塚II』上総国分寺台発掘調査概要VI(滝口宏編, 上総国分寺台発掘調査団・市原市教育委員会, 1979)

『祇園原貝塚III』上総国分寺台発掘調査概要XI(滝口宏編, 上総国分寺台発掘調査団・市原市教育委員会, 1978)

『袖ヶ浦町伊丹山遺跡』(伊丹山遺跡発掘調査団・袖ヶ浦町水道事業, 1979)

『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II』(千葉県教育委員会・財団法人千葉県文化財センター, 1980)

『吉見台遺跡群現地説明会資料』(佐倉市吉見台遺跡群調査会, 1984)

『千代田遺跡』(四街道千代田遺跡調査会, 1972)

『池谷津遺跡』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II(千葉県開発庁・財団法人千葉県都市公社, 1973)

『龍角寺ニュータウン遺跡群』(龍角寺ニュータウン遺跡調査会・日本考古学研究所, 1986)

『千葉県文化財センター年報No.13』(財団法人千葉県文化財センター, 1988)

『千葉県文化財センター年報No.14』(財団法人千葉県文化財センター, 1989)

千葉県出土の柄鏡形住居一覧

(1. 住居跡()柱のみ 2. 張出し部はピット間の計測値 3. 柱穴○は壁柱穴 数字は主柱穴本数 4. 炉○地床炉 △土器囲い炉 なお、参考資料も含み一覧とした。)

番号	遺跡名(遺構No.)	形態	住居跡		張出部			埋藏	柱穴	炉	時期	備考
			形状	計測値	形状	ア	イ					
1	市川市堀之内権現原地区 19号	I d	円	(5.0×5.5)	扇	1.3	1.2	1.1	○	○	加EIV	埋藏、張出部前面の延長線上に2基、内1基から鹿角。
2	曾谷貝塚17地点	I b	円	5.8×5.8	方	1.1	1.0	0.7	×	主柱穴 4本、○	〃	石礫出土、1点張出部基部に倒れ、床面にくいこんだ状態。張出部掘込み。
3	松戸市金楠台遺跡 2号	II b	円	3.8×3.8	方	2.2	0.4	0.4	?	○	〃	張出部前面にピット埋藏か、石礫片出土、張出部掘込み
4	坂之台遺跡 1号	II a	円	4.3×4.2	方	3.7	2.1	2.1	×	主柱 4	〃	
5	〃 〃 2号	II a	円	4.7×4.7	方	1.3	1.1	1.1	×	○	〃	張出部掘込み
6	〃 〃 3号	II b	円	4.2×4.2	方	2.4	0.9	0.9	×	○ △	〃	
7	市川市堀之内堀之内地区 1号	I b	円	(5.0×6.0)	方	0.7	5.7	1.0	×	○	称名寺	張出部前面に扇状にピット配列(1~2本)
8	〃 〃 2号	I d	円	(5.5×5.5)	扇	2.2	4.9	0.9	×	○	〃	張出部前面にピット
9	〃 〃 3号	I d	円	(6.0×6.5)	扇	1.1	1.6	0.7	×	○	〃 I	〃
10	〃 〃 5号	I b	円	(5.5×5.5)	方	2.3	1.2	0.7	×	○	〃	〃 , 張出部掘込み
11	〃 〃 8号	I b	円	(5.5×6.0)	方	1.0	1.0	1.0	○	○	〃 I	〃 , 張出部基部に埋藏
12	〃 〃 権現原地区 3号	I b	円	(4.5×5.0)	方	0.6	1.0	0.9	○	○	〃	張出部基部に埋藏、張出部掘込み
13	〃 〃 16号	I e	円	(5.5×5.5)	扇	0.8	0.9	0.7	○	○	〃 II	〃
14	〃 〃 17号	I d	円	(5.5×5.5)	扇	0.9	1.7	0.9	×	○	〃 II	〃
15	〃 〃 18号	I b	円	(5.5×5.5)	方	0.9	0.9	0.9	○	○	〃 II	張出部基部に埋藏
16	〃 曾谷貝塚 E 3号	I d	円	3.5×3.2	扇	0.9	1.0	0.5	?	×	〃	張出部前面及び基部にピット
17	松戸市金楠台遺跡 1号	I b	長円	5.1×4.3	方	1.1	1.2	1.2	○	○	〃 I	張出部前面にピット、張出部基部に埋藏、周囲に石礫
18	〃 一の谷西貝塚 1号	I e	長円	4.8×4.0	扇	0.8	2.3	0.6	○	?	〃 I	張出部前面及び基部にピット
19	〃 〃 3号	I b	長円	5.5×5.0	方	1.0	0.9	0.9	○	?	〃 I	〃
20	〃 〃 5号	I b	円	4.2×4.2	方	0.8	0.7	0.7	○	?	〃 II	〃
21	〃 貝の花貝塚 24号	I b	楕円	5.0×4.6	方	0.5	0.7	0.9	○	?	〃	張出部基部に埋藏
22	市川市祇園原貝塚 58号	I d	円	4.2×4.2	扇	1.5	1.3	1.0	×	○	〃	張出部基部及び前面にピット、イノシシ骨出土

番号	遺跡名(遺構No.)	形態	住居跡		張出部			埋藏	柱穴	炉	時期	備考
			形状	計測値	形状	ア	イ					
23	袖ヶ浦町伊丹山遺跡 6号	I b	長円 (5.5×4.5)		方	0.9	0.8	0.8	○	○	称名寺	住居内に埋藏
24	四街道市千代田IV区 3号	I b	長円 5.2×5.5		方	0.5	0.6	0.6	○	○	〃	〃
25	市川市堀之内権現原地区 5号	1 d	円 (8.0×8.5)		扇	1.5	(1.4)	1.1	×	○	堀之内	
26	〃 〃 〃 6号	1 d	円 (5.0×6.0)		扇	1.3	(1.7)	(0.8)	×	○	〃	
27	〃 〃 〃 7号	I d	円 (5.0×6.0)		扇	1.1	1.7	0.7	×	○	〃	
28	〃 〃 〃 8号	1 d	円 (6.0×6.5)		扇	1.4	2.7	0.7	×	○	〃	
29	〃 〃 〃 11号	I d	円 (4.5×5.0)		扇	2.0	3.0	2.1	×	○	〃	
30	〃 〃 〃 20号	1 d	円 6.0×6.0		扇	1.5	1.7	1.3	×	○	〃	
31	〃 姥山貝塚 4号	1 d	円 4.5×4.5		扇	1.4	2.0	0.6	×	○	〃	
32	我孫子市下ヶ戸貝塚 1号	1 d	円 6.6×6.6		方	1.2	0.9	0.9	×	○	〃	
33	千葉市木戸作貝塚 28号	1 d	円 5.0×5.0		扇	1.7	2.6	1.0	○	○	〃	住居内に埋藏, 張出部前面にビット
34	〃 〃 〃 29号	1 b	円 4.3×4.3		方	1.6	1.4	1.0	×	○	〃	
35	〃 〃 〃 30号	1 b	円 6.0×5.0		方	1.8	2.2	1.2	×	○	〃	
36	〃 〃 〃 33号	1 e	円 5.5×4.8		扇	1.2	1.3	1.1	×	○	〃	住居内に張出部状ビット群
37	〃 〃 〃 3号	1 b	円 5.5×5.5		方	1.1	1.2	1.2	×	○	〃	
38	〃 〃 〃 4号	1 e	円 5.7×5.4		扇	2.5	1.4	0.6	×	○	〃	張出部掘込み, 張出部掘込み内にビット
39	〃 〃 〃 6号	1 e	円 4.5×4.5		扇	1.2	1.8	1.3	×	○	〃	〃
40	〃 〃 〃 9号	1 d	円 6.0×5.0		扇	1.7	2.5	1.1	×	○	〃	〃
41	〃 〃 〃 10号	I b	円 7.0×6.6		方	(0.7)	(1.4)	(1.4)	×	○	〃	〃
42	〃 〃 〃 13号	V	円 6.5×6.5		円	-	-	-	×	○	〃	〃
43	〃 〃 〃 18号	V	円 5.4×4.3		円	-	-	-	×	○	〃	張出部にビット, 張出部掘込み
44	〃 矢作貝塚 11号	1 d	円 4.6×4.8		扇	1.0	1.2	0.6	×	○	〃 I	張出部前面にビット
45	〃 〃 〃 12号	1 d	円 4.5×5.0		方	0.8	0.6	0.6	×	○	〃 I	〃 中央にビット
46	〃 〃 〃 13号	1 d	円 5.3×5.3		扇	2.6	2.5	0.9	×	○→△	〃 II	〃 前面にビット, 建て替え

番号	遺跡名(遺構No.)	形態	住居跡		張出部			埋藏	柱穴	炉	時期	備考
			形状	計測値	形状	ア	イ					
47	市原市祇園原貝塚 38号	1d	円	9.5×7.3	扇	2.5	5.4	1.2	×	○	堀之内I	張出部前面にピット
48	" "	1d	円	5.9×5.3	扇	1.5	2.1	1.1	×	○	" I	"
49	" " GIV101	1e	円	4.9×4.4	扇	1.0	1.6	1.0	×	○	" I	"
50	酒々井町伊藤白幡遺跡 140号	1d	円	4.8×4.8	扇	1.5	2.3	1.2	×	○	"	"
51	" "	1d	円	5.2×5.2	扇	1.2	2.3	0.8	×	○	"	張出部前面にピット
52	市川市下台遺跡4地点	(I)	円	—	—	—	—	—	?	○	"	(写真から)
53	" "	(II)	円	—	—	—	—	—	?	○	"	(写真から)
54	市川市曾谷貝塚20地点 1号	(I)	楕円	4.7×5.1	方	0.8	0.8	0.6	×	○	加曾利B3	住居内へ入口
55	市原市祇園原貝塚 J3A	1d	円	8.5×7.8	扇	1.8	2.4	0.8	×	○	加B2~B3	扇変形
56	" "	1d	円	8.3×7.3	扇	1.3	3.5	0.7	×	○	加B末~曾谷	"
57	" "	Vd	D	8.9×8.0	扇	1.4	3.9	0.7	×	○	曾谷	"
58	" "	III d	方	6.5×4.9	扇	1.2	1.8	0.7	×	○	安行1~II	"
59	" " SB515	III a	隅丸方	4.5×5.0	方	0.7	0.7	0.7	×	○	安行1~II?	"
60	" " J-4	VI a	台	—	方	1.2	1.6	1.6	×	○	安行I	上下長 5.8×6.2×6.2
61	四倉道市千代田遺跡IV区 5号	V c	D	4.0×5.6	扇	0.6	0.8	0.3	×	○	"	張出部基部にピット
62	船橋市池谷津遺跡 1号	III f	隅丸方	8.0×7.4	方	3.0	2.5	3.0	×	○	安I	扇変形
63	千葉市築地台貝塚 3号	I b	円	6.6×6.2	方	0.5	0.7	0.8	×	○	安行IV a	住居拡張(8.2×7.6)
64	市原市祇園原貝塚 J-5	IV d	台	—	扇	1.3	1.8	1.9	×	○	"	上下長 5.2×6.4×4.8, 扇変形
65	佐倉市江原台遺跡 J-2	V	円	3.5×3.6	円	0.9	0.8	—	×	?	加IV	"
66	" " J-3	V	円	4.5×4.5	円	0.4	0.6	—	×	○	"	"
67	" " J-4	V	円	3.7×3.7	円	0.7	0.6	—	×	○	"	"
68	" " J-18	V	円	3.6×3.6	円	0.4	0.7	—	○	○	"	張出部に埋藏
69	栄町龍角寺ニュータウンNo.4 4号	V	円	4.0×4.0	円	0.65	0.9	—	×	○	"	"
70	" " " 9号	V	円	38.5×35.0	円	0.4	0.8	—	○	○	"	住居内に埋藏